地域社会の協働過程に関する基礎分析
坪井川サイエンスショップを事例に

田中　尚人[1]・岩田　圭佑[2]
[1]熊本大学 政策創造研究教育センター 准教授
[2]熊本大学 大学院自然科学研究科 博士後期課程

近年、地域マネジメントや公共政策デザインに際して、地域住民の参加や地域社会の協働が求められている。本研究では、平成19～21年度まで筆者らの研究室が関与した坪井川サイエンスショップの活動記録を基に、地域社会の協働過程の基礎的な分析を行った。その結果、専門家として地域マネジメントに関わる大学の資質として、①学生供給による地域活性、②業務以前の業務が可能、③多様な情報発信、の3要素が抽出された。また、地域マネジメントにとっては地域住民の多様かつ日常的な生活環境に対する改善意欲がその推進起点となること、地域住民、行政、第三者のどの主体が欠けても、地域マネジメントの持続可能な進展が難しくなること、などが分かった。

１．はじめに

⑴　研究の背景と目的

近年、様々な地域において、市民参加、行政と地域住民との協働の必要性が求められている。地域マネジメントや、公共政策デザインに対して、参加や協働が必要であることは認められているものの、そのメカニズムを解明しようという試みは少ない。本研究では、グループ・ダイナミックス理論[1)]を援用して、地域社会の協働過程を理解しようとするものである。本研究では、平成19年度から平成21年度まで筆者らの研究室（熊本大学工学部社会環境工学科地域風土計画研究室）が「熊本大学政策創造研究教育センター事業市民参加によるサイエンスショップ型研究『坪井川の川まちづくり』」として関与してきた地域マネジメントの活動記録を基に、地域社会（地域住民、行政、大学の3者）の協働過程の基礎的な分析を行った。

⑵　坪井川サイエンスショップの概要

坪井川は、熊本城の内堀を形成し、江戸時代は熊本の人々の食料等の物資輸送を担う舟運路として、市民の生活に密着した川であった。高度経済成長を経て現在では、川がまちから切り離された感も否めないが、近年「熊本城400年と熊本ルネッサンス」県民運動本部など城下町くまもと再生への市民の関心が高まり、水辺の重要性が中心市街地の活性化や様々な場所でのまちづくりの中で期待されている。

第Ⅱ期（平成19・20年度）では、これまでのサイエンスショップ（以下、ＳＳと略平成17・18年度：第Ⅰ期[2)]）で取り組まれてきた、ＳＳ本来の役割である「大学が持つ専門的知識を地域住民と共有し問題解決すること」に加え、持続可能なまちづくり活動を支援するために、自分たちの意志で流域管理や景観形成、まちづくりに協力し、自己組織化して

いくような、坪井川に沿ったコミュニティの形成を目的とした。

そのため、このような地域コミュニティを牽引し、大学とのパイプ役となるリーダー的人材の育成が重要となる。この地域リーダーは、専門家とともにＷＳなどを通じて、地域の歴史や文化、環境の把握・解明を地域住民たちと一緒に行い、確認しあうことを心がけ、地域を育てる場づくりを担う人材である。

以上のように、平成19・20年度：第Ⅱ期の坪井川サイエンスショップでは、坪井川を基盤とした人づくり、場づくり、まちづくりを目指す。

⑶ 坪井川ＳＳ第Ⅱ期の体制

坪井川ＳＳは、市民メンバーと学内の専門家メンバーから成る。（○印は、第Ⅰ期以来のメンバー）

【市民メンバー】

○荒井　正俊　　有限会社むろや　代表取締役
　池田　寛章　　熊本大学大学院自然科学研究科　博士前期課程１年生
　島田　喬祥　　熊本県立大学環境共生学部　４年生
　西　　英子　　熊本県立大学環境共生学部　准教授
○西嶋　公一　　オフィス・ムジカ　代表
　反後　人美　　ナチュラル＆ハーモニックピュアリィ　代表
　野呂有佳子　　熊本大学工学部　４年生
　増山　晃太　　熊本大学大学院自然科学研究科　博士後期課程２年生
○宮本　茂史　　宮本建設株式会社　専務取締役
○村上　範年　　有限会社 村上カラシレンコン店　代表取締役
　森　　顕信　　熊本大学政策創造研究教育センター　政策研究員

【学内専門家メンバー：熊本大学】

○柿本　竜治　　政策創造研究教育センター　准教授
　田中　尚人　　自然科学研究科環境共生工学専攻社会環境マネジメント講座　准教授
　星野　裕司　　自然科学研究科環境共生工学専攻社会環境マネジメント講座　准教授
○山田　文彦　　自然科学研究科環境共生工学専攻広域環境保全工学講座　教授

⑷ 坪井川ＳＳ第Ⅱ期の活動方針

平成19・20年度：第Ⅱ期における、坪井川ＳＳにおける改善案を以下に示した。

１）地域リーダーの育成

これまで坪井川サイエンスショップでは、大学が持つ専門的知識を地域住民と共有し、問題解決することを目的に運営が行われてきた。もちろん、二年間の研究成果は素晴らしいものであるが、今後も持続可能なまちづくり活動を支援するためには、自分たちの意志で流域管理やまちづくりに協力し、自己組織化していくコミュニティが必要となる。そのためにも、このような地域コミュニティを牽引し、大学とのパイプ役となるリーダー的人材の育成が肝要である。

２）自主的なフィードバック

当研究室では、学生のまちづくりスキルの向上とともに、地域住民の教育・啓蒙活動

に取り組んでいる。この取り組みには、学生たちが、地域の歴史・文化・環境の把握や風土解明を地域住民たちと合同で行い、ＷＳ等を通じて確認しあうことにより、自分たちでフィードバックする場が重要である。

3）他者との連携

生涯学習的な地域学習を支え、地域マネジメントを担う地域リーダーは、景観や防災など地域の物理的環境や生活全てがまるごと対象となることを理解し、既存のコミュニティ活動を理解しながらも、今後10年、20年の間に迎えるであろう超高齢化社会を見据え、他のコミュニティや行政との連携を図る必要がある。

4）地域のかたち

景観法時代を迎え、地域の基盤となる坪井川のようなインフラストラクチャーには、様々なコミュニティが関わることになる。歴史や景観、環境など水辺の抱える都市機能は多種多様であり、これらの調和を大学の専門知識を利用するかたちで、持続可能な形で実現していくようなコミュニティづくりをめざす地域リーダーの育成が、次のサイエンスショップの課題となる。

5）サイエンスショップが求める人材

このため、サイエンスショップには専門的知識を提供する者のみならず、ファシリテーターとなって、地域リーダーとともに合意形成を図る学生や行政職員などの様々な主体、これらが一同に会してＷＳを行うことができるネットワークや場が必要となる。また参加するコミュニティのメンバーも、年配の方だけでなく、学生や児童など、次世代のまちづくりを担う人材にも積極的に参加して頂きたい。

２．平成19年度の活動実績

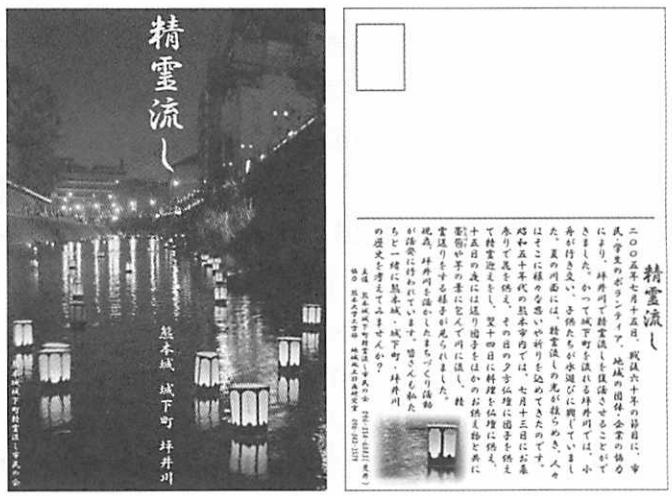
⑴　坪井川精霊流しサポート＜準備会＞

1）実施日：2007年７月13日（金）

11：00～12：30　場所：ピュアリィ

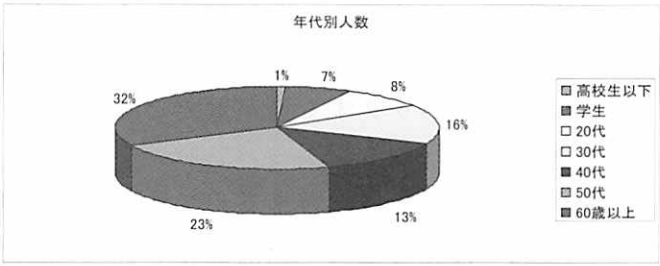
2）実施内容：平成19年度の坪井川サイエンスショップのコアメンバーによる準備会とした。７月15日（日）に「熊本城城下町精霊流し市民の会」の主催で行われる復活後３回目の精霊流しをサポートすることを目的に、より多くの方々に精霊流しを知って頂けるよう、ポストカードを作成した。また、当日参加者や観光客に対して、精霊流しに関するアンケートを行った。

3）成果：ポストカードは1,000枚印刷し、ほぼ配布を終えた。アンケートの分析は、以下の通りであり、精霊流しの反省会時に発表した。



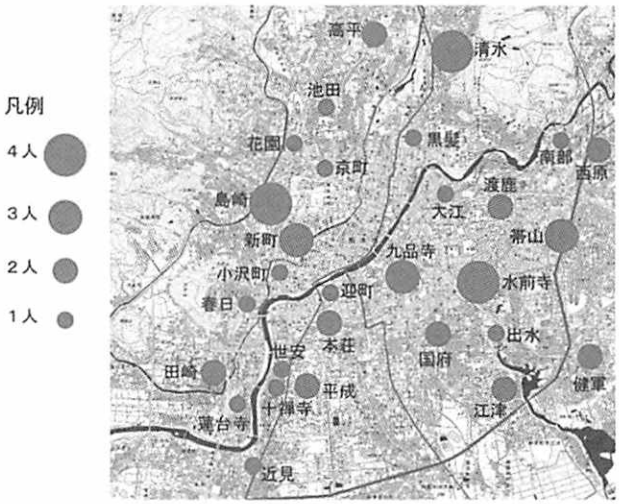
図－１　ポストカード

・50歳代以上が過半数
・今年、初めて参加したという方が75%
・ほとんどが熊本県内からの参加者
・新聞、情報誌などのメディアから知った人が多数であった
・坪井川の川まちづくりに対しては、歴史を重視すべき、と回答した方が多かった
・景観とはゴミ問題と捉えておられた



図－２　年代別参加者割合

【自由回答欄の一部】
・ごみがないほうがよい。
　ごみを流さないように
・熊本城の歴史を活かしたい
・憩いの場となってほしい
・安全じゃないと来たくない
・一番の観光である
・よく氾濫するので安全が大切
・親しまれる川になってほしい



図－３　県内の参加者を地域別に表示

⑵　第１回ＷＳ

１）実 施 日：2007年８月30・31日（木・金）
　　実施場所：屋外及びオフィス・ムジカ
２）実施内容：「坪井川を測る」

坪井川を活かした川まちづくりの基盤となる坪井川そのものが、まちとどれぐらい親しい存在なのか、坪井川を見ながら、感じながらまち歩きが楽しめるかを「測る」良イベントを行った。

第１部　「坪井川のある散歩道」デザインサーベイ
　実測①　８月30日（木）15：00～17：30　春日橋・白川橋集合「駅からまちへ」
　　参加者：池田、島田、野呂、村上、森、田中、(他３名研究室)、前田（熊日）
　実測②　８月31日（金）９：30～11：30　厩橋集合「城からまちへ」
　　参加者：池田、島田、野呂、西嶋、森、田中、(他４名研究室)
【携行品など】筆記具、デジタルカメラ、メジャー、適した服装、調査の手引き
第２部　デザインサーベイ報告会＆キックオフミーティング
　８月31日（金）18：00～19：00　報告会

二日間に渡り、駅からまちへ、城からまちへと、まち歩きした結果を、池田がまとめ発表した。坪井川が、城下町、中心市街地と熊本駅を結ぶ重要な水辺であることが認識された他、十分歩行可能な徒歩圏として９区のゾーニングが設定できた。




写真－１　ＷＳの様子



図－４　実測①用地図



図－５　まち歩きの結果得られたゾーニング

⑶　第２回ＷＳ

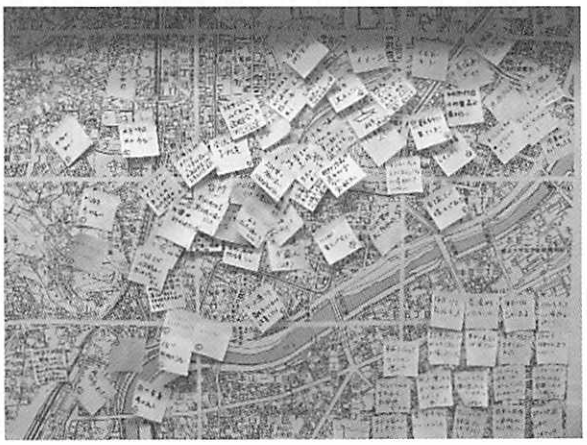
１）実施日：2007年12月４日（火）19：00－21：00
　　場　所：熊本大学工学部まちなか工房

２）実施内容：
- まち歩きの報告
- メンバーの自己紹介（活動紹介）
- 坪井川の過去から現在へ：振り返り

３）成果：
- 市民委員と学生委員の間で、歴史を介して坪井川に関する事象の伝承が見られた。
- 過去から現在へ事項を整理すると、将来に向かってのビジョンが重要であることが分かった。
- 坪井川の川まちづくりに関わる可能性のある団体が、多数あることが確認された。
- それら多数の団体や個人が、坪井川ＳＳに関われない事情を考える必要がある。



写真－２　歴史を掘り起こすＷＳの様子



写真－３　まちの履歴（歴史）を地図で共有

⑷　第３回ＷＳ

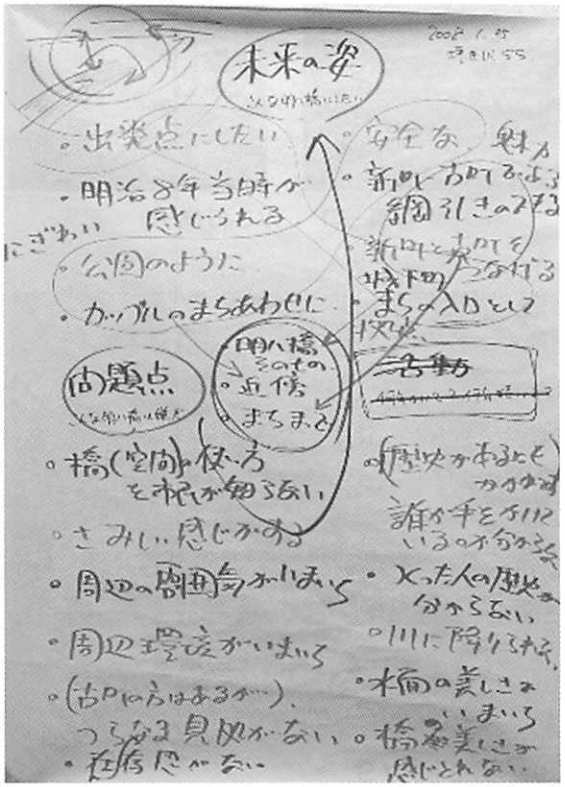
１）実施日：2008年１月25日（金）
　　18：30－20：30　場所：ピュアリィ

２）実施内容：
・第２回の報告
・明八橋を介して、過去から現在、そして未来へ繋がるビジョンを描く

３）成果：明八橋に関して、

【現状：問題点】
・周辺環境、雰囲気がぱっとしない
・環境の歴史が分からない
・橋自体の魅力が伝わらない
・坪井川や水面の美しさがそれほどでもない

【未来：ビジョン】
・城下町の入り口に
・賑わいのある
・魅力ある
・歴史が感じられる



写真－４　当日のＦＤ

という意見が述べられ、現在から未来へ繋げるための実行案としては、①明八橋そのもの、②橋の近傍、③まちまで引き込んで、の３つぐらいの規模で考える必要があることが、ファシリテーションドローイング（ＦＤ）のかたちでまとめられた。また、本会議で、まとめられた提案の一部は、３月22－23日に行われる川下りのイベントの一部に採用された。

⑸　第４回ＷＳ

１）実施日：2008年３月１日
　　18：00－20：00
　　場　所：熊本市国際交流センター

２）実施内容：
・桜町界隈の坪井川を洗馬橋までまち歩き
・洗馬橋を対象に明八橋と同じＷＳを開催した
・まち歩き前に、各人に坪井川沿川を考えるためのテーマが渡され、グループワークからは、項目を束ねての議論を行った


写真－５　まち歩きをした結果を即議論

３）成果：洗馬橋に関して

【現状：課題】
・有名である
・郵便局側に、有効活用できそうな残地がある
・史跡区域である一新校区側の草刈りを、桜町の方々が行っている

・お城側は、様々な管理者が関わっており、規制なども多くある。
・洗馬橋と高水敷を結ぶ階段が粗末だ
・水面から高水敷が遠い
・入っていいか悪いかが分からないだけで、そんなに問題はないのではないか
【未来：ビジョン】
・洗馬橋から熊本城を眺める眺望を活かしたい
・回遊できるような遊歩道を設えたい
・洗馬橋周辺の交通環境を整理したい
・ほっと一息つけるような憩いの場所にしたい
などの意見が出た。時間的な制約があり具体的な整備には結びつけず、洗馬橋の重要性を示すにとどまったが、今後の坪井川ＳＳにとって重要な場所となることが確認できた。

⑹ 第５回ＷＳ

１）実施日：2000年３月20日（木・祝）15：00－18：00
　　場　所：熊本大学工学部まちなか工房
２）実施内容：
　　坪井川ＳＳ：川まちづくり勉強会
「本庄のまちづくりに学ぶ：早稲田大学との連携を事例に」
中山道、利根川舟運など交通の要衝であり、近世より栄えた埼玉県本庄市には、新幹線駅「ＪＲ本庄早稲田駅」の駅前に早稲田大学大学院国際情報通信研究科のキャンパスができました。以来、まちづくりと大学の連携が始まっています。まちづくりのニーズと大学の地域貢献が繋がっていく様を、実際に経験された方々から、地域住民、行政、大学、様々な主体が入り交じって学ぶ企画である。
【プログラム】
・趣旨説明：田中尚人（熊大)、佐々木葉（早稲田大）
・坪井川ＳＳ成果報告：池田寛章（熊大）
・本庄まちづくり大学からまちＮＥＴへの歩み：戸谷正夫（本庄まちＮＥＴ・代表）
・まちＮＥＴのめざすもの：佐々木滋生（本庄まちＮＥＴ・副代表）
・川から見えるまちの姿－本小山川プロジェクトの意義：佐々木葉（前掲）
・フリー・ディスカッション
３）成果：
①趣旨説明：田中尚人（熊大）
・サイエンスショップとは
・大学の地域貢献はいかにあるべきか？
・本来、まちづくりのヴィジョンは地域にあるべきであり、大学は何に関与するのか？
②坪井川ＳＳ成果報告：池田寛章（熊大）
③本庄まちづくり大学からまちＮＥＴへの歩み：戸谷正夫（本庄まちＮＥＴ・代表）
・本庄とは（利根川、中山道、からっ風、新幹線）
・本小山川プロジェクト
・蔵巡りからスタート、お宝発見、世間遺産、

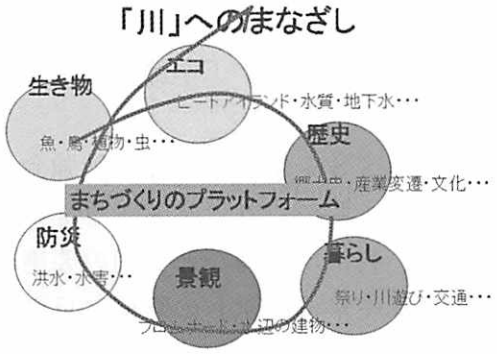
・まちづくり大学から、食べる、農への興味「五臓六腑の会」
・もっと自立的に「まちＮＥＴ」へ　建物・街並Ｇ　歴史・景観Ｇ　食・農・風土Ｇ
・吉の湯に入る会、十二天社、川歩き
・３人集まれば、ＰＴ（プロジェクトチーム）



写真－６　「五臓六腑の会」

④まちＮＥＴのめざすもの：
佐々木滋生（本庄まちＮＥＴ・副代表）
・まちと大学の連携@新都市地区
・本小山川の「清流復活」
・学生と子供、学生と地元住民、出会い！
・「川と歴史、景観」学生と地元のコラボ
・問題意識からまちづくりに入るか
ただ、面白いからまちづくり、なのか？

⑤まちづくりの“ツボ”は川にある
－本小山川プロジェクトの意義：佐々木葉
・INVISIBLE STREAM
・今まで見えている風景から見えない風景が繋がり、流れ、新しい地域の見方
・川へのまなざし＝まちづくりのプラットホーム
（生物、エコ、歴史、暮らし、景観、防災）



図－６　「川へのまなざし」佐々木

・川の特質
１．上から下へ流れる：思うようにならない
２．水は流れる：どこからどこまで流れるのか
・坪井川百景　“川はまちを引き受ける”

⑥フリー・ディスカッション
飯嶋：
・学生と地域住民の出会いは、坪井川でも実現可能ではないか、もっと学生が地域へ
・何故坪井川なのか？への回答＞熊本の人は、まちが好き、上通り、下通り、城下町などなど、坪井川へはあまり来ない

西嶋：
・坪井川は行政主導ではなく、市民主体でやってきた。精霊流し、水明かり、など、文化財などの種々の規制をかいくぐってやってきた。
・あまりにもメニューが多すぎる
・地域で頑張っている人たちの顔が見える地図をつくればいいのではないか？

⑦第５回ＷＳのまとめ
『大学がまちづくりに関わる意義』の３要素
・学生供給による地域活性：「よそ者、若者、馬鹿者」誰とでも交流可能
・業務以前の業務が可能　：差し戻し、超長期的な地域マネジメントの視点
・多様な情報発信　　：大学、研究、学生のネットワーク、他地域との交流

3．平成20年度の活動実績

平成20年度は、坪井川ＳＳとしては第Ⅱ期の２年目という位置づけである。１年目からメンバー構成が変化し、市民メンバーのなかに、特に「学生メンバー」という枠を設け、新たな活動を開始した。また、年間活動内容を表－１にまとめた。

［学生メンバー］

岩田圭佑　　熊本大学大学院自然科学研究科　博士後期課程１年生
石田　聖　　熊本大学大学院社会文化学研究科　博士後期課程２年生
柏木史成　　熊本県立大学環境共生学部西英子研究室　ＯＢ
志垣孝行　　同上
原田茉林　　熊本大学大学院自然科学研究科　博士前期課程２年生
増山晃太　　同　博士後期課程３年生
松元里紗　　同　博士前期課程１年生
馬場啓維　　熊本大学工学部　４年生

表－１　平成20年度坪井川ＳＳ活動内容

月	日	ＳＳの主な取組み	坪井川関連のまちづくり活動
4			
5	１日	第１回ＳＳ打ち合わせ	
6	12日	第２回ＳＳ打ち合わせ	
7	15日 31日	坪井川精霊流しアンケート 第３回ＳＳ打ち合わせ	
8			
9	19日	第１回坪井川でかたらんね	
10	７－17日 21日	坪井川の思い出発掘アンケート 第２回坪井川でかたらんね	舟運復活推進会議発足
11	11日 14－15日 13日 27日 28日	舟運調査（伏見，彦根，近江八幡） 坪井川撮影会 第３回坪井川でかたらんね	くまもと城下の町づくり連絡協議会準備会 まちづくり円卓会議
12			
1	22日		第２回連絡協議会
2	12日 23日 25日	ＳＳ地図作り打ち合わせ	第３回連絡協議会 第４回連絡協議会
3	21日	第４回「大」坪井川でかたらんね	坪井川園遊会

(1)　第１回打合せ

１）日　時：平成20年５月１日（木）
　　会　場：ピュアリィ
　　参加者：西嶋・反後・荒井・宮本・村上・田中・
　　　　岩田・増山・松元・馬場・志垣・柏木

2）議題

①今までのサイエンスショップの問題点

昨年度はＳＳの方向性と進め方の共有がなされていなかったという点を反省し、川まちづくりやサイエンスショップという言葉の持つ意味についての共有を図った。その中で、地域にいる人たちはぼんやりしかわかっていなかったり、うまく表現できなかったり、目標を達成したいのだけど何が課題か分からないことを、サイエンスショップが明確にし、解決していく場であるということを共有できた。一方で、昨年度は大学側が教えてもらう色が濃くなってしまい、相談・依頼のもとにというサイエンスショップの原則が守られなかったため、開かれたサイエンスショップから閉じたサイエンスショップになってしまい、周りのまちづくり活動の勢いに大学側がついていけなかったという点が昨年度の反省として挙げられた。今後は、全員が参加できることが重要で、市民が後ろからついていくということが無いようにすべきであるということが認識できた。



写真－7　ＷＳの様子

②今後サイエンスショップがどういう姿勢で活動するか

地域の動きが激変しそうな中で、進み方がこのままでいいのかという不安があるという意見が出された。例えば、イベントをやっても地元の人に理解してもらわないと意味がない、というようなことである。このようにもう始まっていることは現実として、それをプラスに動かしていくために情報を早く察知していく必要があるということが重要である一方で、新町古町には既に仕組みが存在しているので大学が上に立ってやっていく必要は無いのではという意見が出された。

③地域が何を望んでいるか

大学がどう関わっていくのかの議論は終わって、まちの人たちが何を欲しがっているかの議論が大切という方向性が示された。その中で、坪井川に住んでいる人たちがどう動くかのとっかかりを示すことが必要で、そのために例えば沿川にアンケートを実施して、こういうことができるという形を示すといったことが重要ではないかという意見や、サイエンスショップ自体が、地元にいる熱意を持った人たちの窓口になるべきであるという意見が出された。

⑵　第２回打合せ

日　時：６月12日（木）

会　場：わっしょい

参加者：西嶋・反後・荒井・宮本・田中・岩田・
　　増山・志垣・柏木

議題

・ＳＳをどのような組織にしてゆくか

・アンケートの内容について



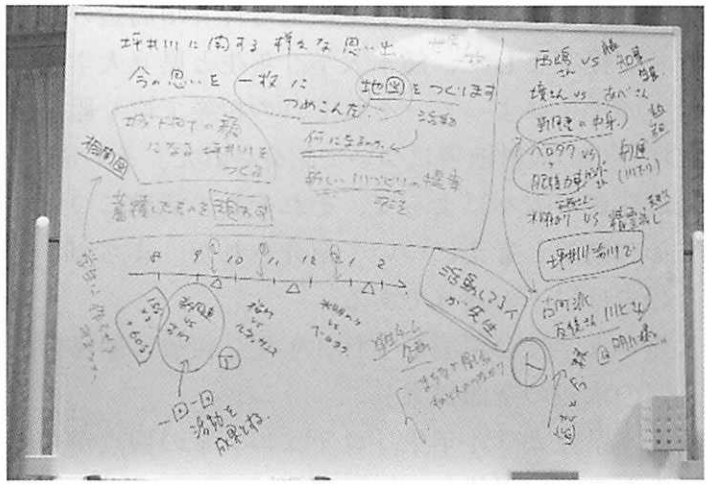
写真－8　ＷＳの様子

組織としてまだやるべきことが明確に定まっておらず、具体的な組織図が浮かび上がる段階までは至らなかった。しかし、過年度から関わって頂いている西嶋さんに市民メンバー代表を務めてもらうことが決定した。

アンケートについては、対象を上下流へ広げていくか、坪井川の流れと垂直な方向へと広げていくかの議論に始まったが、結局先と同様に、ＳＳとして何がやりたいのかという議論になった。広い範囲にどうしたいかを聞くアンケートもあれば、狭い範囲に参加を呼び込むアンケートもある。誰に知ってもらう、または参加してもらうのかを考えることがまず大切であるという結論に至った。それを受けて、参加を呼び込むよりも今後のＳＳの活動方針を探るために、①現在流域で起こっている内容に即したアンケート②坪井川での遊び方を聞くアンケート、をとることで、今後のＳＳの活動に役立てるアンケートとすることになった。

⑶　第３回打合せ

日　時：７月31日（木）
会　場：国際交流会館
参加者：西嶋、田中、岩田、志垣
議題
・アンケートの実施について
・今後の取り組みについて



写真－９　ＷＳの議論の成果

前回の会議で挙がったアンケートの実施が遅れてしまい、ＳＳメンバーからはＳＳが何をやろうとしているのかがはっきりしていない状況に戸惑いが出てしまった。そこで、昨年度から要望の出ていた顔の見える地図づくりについて、「坪井川の思い出と坪井川に対する思いを詰め込んだ地図」というコンセプトのもとで「坪井川おもしろMap」を作成することとなった。この地図の内容については、「坪井川でかたらんね」というワークショップを実施し、住民の人たちのまちづくり活動報告や坪井川に対する思いを語り合う場を設けることとした。また、新町、古町、桜町地区の住民を対象に「坪井川の思い出発掘アンケート」を実施し、坪井川の好きな風景や坪井川での思い出を聞きだすこととした。

⑷　第１回坪井川でかたらんね

日　時：９月19日（金）
テーマ：「これまでのまちづくり活動紹介」
会　場：国際交流会館
参加者：西嶋、長濱、反後、村上、田尻（田尻ウィンドウ）、荒井、川上（川上酒店）、上村（源zo-ne）、安部（桜町自治会長）、境（中唐人町自治会長）、松元、原田、志垣、柏木、村上、古賀、森、石田（熊大大学院社会文化科学研究科）、福山（熊日）、他熊大学生13名

『坪井川でかたらんね』

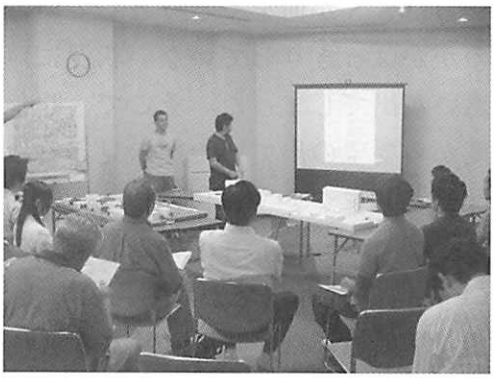
地域の方々が坪井川に対する思いを語れる場として、３回にわたり「坪井川でかたらんね」（以下かたらんね）を開催した。かたらんねの実施により、「坪井川おもしろMap」へ盛り込む内容を得ることはもちろん、地域の方々が坪井川、強いてはまちづくり活動全体に関心を持ってもらうためのきっかけづくりを目的としている。そのためかたらんねでは、ＳＳメンバーだけではなくより多くの住民や行政の参加者を募り、毎回テーマを設けて参加者全員が議論に参加できる形とした。以下に具体的な内容と成果を示す。



図ー７　第１回かたらんね告知

第１回は、これまでのまちづくり活動を再度確認し、今後の方向性を語り合う場となるように、各地域住民の方々によるまちづくり活動の紹介をテーマとした。まず、学生による坪井川周辺のデザイン提案として、熊本大学３年生と県立大学４年生の学生によって、それぞれの授業で取り組んだ坪井川の設計演習について紹介された。その後、地域住民の方々によって、それぞれの活動についてその概要と考えについて紹介された。まちづくり報告は以下の通りである。

・熊本大学社会環境工学科３年生「桜橋・船場橋間の水辺の空間提案」
・熊本県立大学４年生「コミュニティの観点からみた古町の現状」
・村上範年「新風連の活動紹介」
・上村源三「肥後力車の活動紹介」
・川上靖「五福ふれあいまちづくりの会の活動紹介」
・反後人美「坪井川関連のまちづくり活動について」
・境「新呉服橋周辺における坪井川まちづくり活動について」


写真ー10　かたらんねの様子

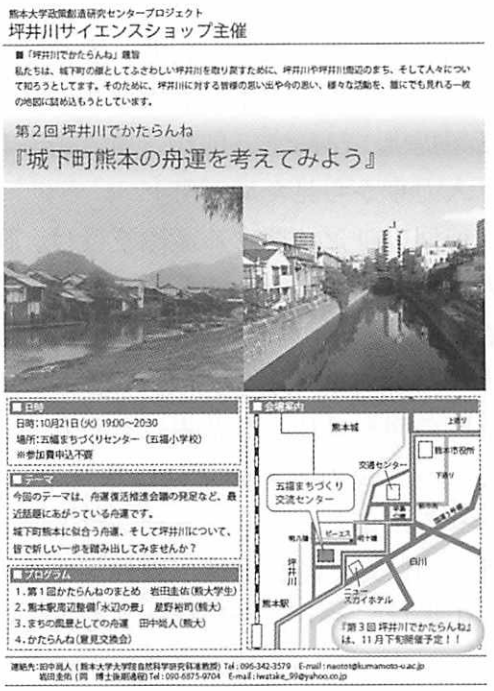
⑸　第２回坪井川でかたらんね

日時：10月21日（火）
テーマ：「城下町熊本の舟運を考えてみよう」
会場：五福まちづくり交流センター
参加者：西嶋、反後、村上、荒井、安部、星野、柿本、岩田（熊本ルネサンス）、井手（熊本フェリー）、城（古町）、増山、松元、原田、志垣、柏木、石田、前田（熊日）、福山、他行政関係者４名、県大学生２名、熊大学生６名

話題提供：
星野裕司（熊大）「熊本駅周辺整備におけるデザインコンセプトと取組について」
田中尚人（熊大）「城下町の水辺における舟運の事例」

この時期は、舟運復活推進会議が発足したことで舟運に対する様々な議論が起こり始めていた。坪井川での舟運が実現した場合、城下町地区のまちづくり活動との連携は欠かすことができない要素となる。そこで第２回のかたらんねでは、坪井川での舟運について、その必要性から具体的な提案までを語り合うことを目的とした。

話題提供として、熊本大学の星野准教授から舟運の起点と考えられている熊本駅について、周辺整備の状況と、駅と坪井川の関連性についてが話された。また田中准教授より、城下町の水辺における事例として京都・伏見の事例が説明された。


熊本大学政策創造研究センタープロジェクト
坪井川サイエンスショップ主催
■「坪井川でかたらんね」趣旨
私たちは、城下町の礎としてふさわしい坪井川を取り戻すために、坪井川や坪井川周辺のまち、そして人々について知ろうとしてます。そのために、坪井川に対する皆様の思い出や今の思い、様々な活動を、誰にでも見れる一枚の地図に詰め込もうとしています。
第２回 坪井川でかたらんね
『城下町熊本の舟運を考えてみよう』
■日時
日時：10月21日（火）19:00～20:30
場所：五福まちづくりセンター（五福小学校）
※参加費申込不要
■テーマ
今回のテーマは、舟運復活推進会議の発足など、最近話題にあがっている舟運です。
城下町熊本に似合う舟運、そして坪井川について、皆で新しい一歩を踏み出してみませんか？
■プログラム
1．第１回かたらんねのまとめ　岩田圭佑（熊大学生）
2．熊本駅周辺整備「水辺の景」　星野裕司（熊大）
3．まちの風景としての舟運　田中尚人（熊大）
4．かたらんね（意見交換会）
■会場案内
熊本城
交通センター
五福まちづくり交流センター
坪井川
白川
ニュースカイホテル
熊本駅
「第３回 坪井川でかたらんね」は、11月下旬開催予定！！
連絡先：田中尚人（熊本大学大学院自然科学研究科連携教授）Tel：096-342-3579　E-mail：naotot@kumamoto-u.ac.jp
岩田圭佑（同　博士後期過程）Tel：090-6875-9704　E-mail：iwatake_99@yahoo.co.jp

図－８　第２回かたらんね告知



写真－11　かたらんねの様子

・坪井川は精霊流しなどでも活用されている。
・川下りなどを通して文化、歴史を掘り起こす活動をしている。
・今は点のつながり。今後考えるべきは、線や面。
・なぜか同時期にまちづくり活動が上昇してきた。昔は別々だった。そろそろひとつで議論できる。
・自分たちでできることはやる。やるときは一緒にやる。70年間川に入ってきて、34年前くらいからは水も奇麗になってきた。
・家の裏から坪井川を見ている。電車からみると、非常に残念だ。城の方から駅までを組織化して、グループで区分、連携をもっと取るといい。生活排水もまだ流れている。
・城下町＝新町・古町でありこれが熊本の魅力。しかし駅が遠く、まちとつなぐために舟運が活かせれればいいと思う。目的は城下町の再生。
・環境に優しい舟があればいい。電気で動くボートを持っているから試乗も可能。

坪井川では地域住民の取り組みにより精霊流しが復活したり、川下りを通じて文化や歴史を掘り起こす活動が行われるようになってきている。その一方で、それらはまだ点で発生しているだけであるため、今後は線や面を意識して進めていく必要がある。しかし、それらの活動がほぼ同じ時期に発生していることから、今後は一つのテーブルで議論されるべきである。

⑹　第３回坪井川でかたらんね

日　時：11月28日（金）

テーマ：「歩いて暮らせる川まちづくり」

会　場：五福まちづくり交流センター

参加者：西嶋、反後、荒井、安部、上村、森、志垣、柏木、熊大学生６名

話題提供：早崎富三郎氏（風流街かねまる屋）「人力車から見た城下町」

前回の舟運に関する議論を受け、陸上と舟運の回遊性は共に考えられるべきであるという観点から、城下町の回遊性について舟運を視野に入れた議論を行うことを狙いとした。また、城下町の回遊は徒歩を基本に行われるべきであるという住民の方々の意見に基づき、「歩いて暮らせる川まちづくり」をテーマとした。話題提供を頂いた早崎氏は城下町地区で人力車の運航を手掛けており、今回は陸上を走る際の問題点などを交えながら城下町の回遊性について話された。


熊本大学政策創造研究センタープロジェクト　坪井川サイエンスショップ主催

●「坪井川でかたらんね」趣旨

私たちは、城下町の顔としてふさわしい坪井川を取り戻すために、坪井川や坪井川周辺のまち、そして人々について知ろうとしてます。そのために、坪井川に対する皆様の思い出や今の思い、様々な活動を、誰にでも見れる一枚の地図に盛り込もうとしています。

第３回 坪井川でかたらんね

『歩いて暮らせる川まちづくり』

日時：11月28日(金) 19:00-20:30

場所：五福まちづくりセンター

●趣旨

近年、熊本では、環境に優しい路面電車や、自転力車、ベロタクシー（休止中）、舟運など、様々な旅客手段について話し合いがなされているが、そもそも、何のためにこれらの交通手段は整備されるのでしょうか？

そこで、今回、第３回「坪井川でかたらんね」は、「歩いて暮らせるまちづくり」がテーマです。

「城下町周辺を楽しみ、坪井川に癒されながらぶらぶらできる～」そんな、皆さんが描く将来像を、語り合ってみませんか？

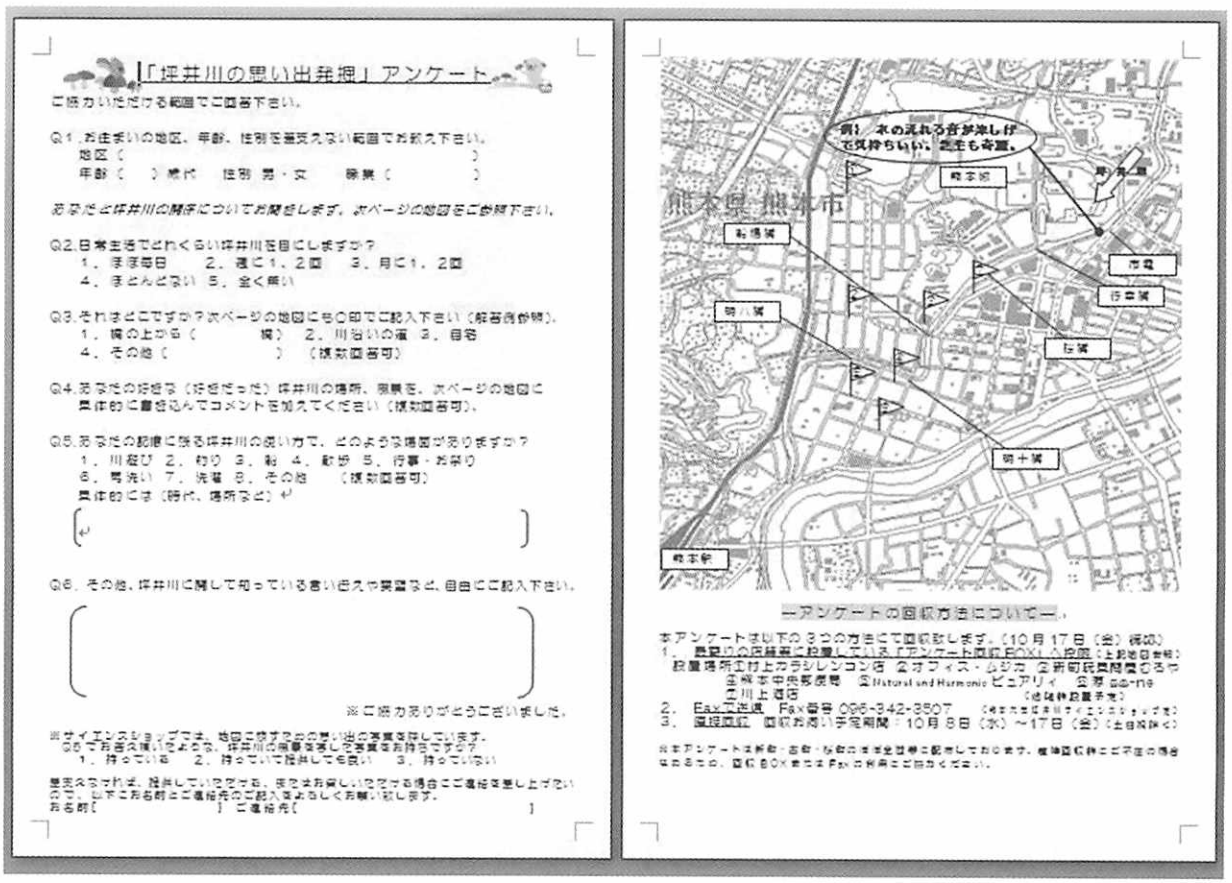
●プログラム

1. 前回の振り返り
2. 「坪井川思い出アンケート」報告
3. 「人力車から見た城下町」
　早崎富三郎 氏　（風流街かねまる屋）
4. かたらんね（ディスカッション）

次回、第４回「坪井川でかたらんね」は、12月中旬から後半、「かたらんねスペシャル」を企画しております。

連絡先：田中皓人（熊本大学大学院自然科学研究科博士後期課程）Tel：096-342-3579　E-mail：nacto@kumamoto-u.ac.jp
前田直也（同　博士後期課程）Tel：090-6875-9704　E-mail：bestaler_99@yahoo.co.jp

図－９　第３回かたらんね告知


「坪井川の思い出発掘」アンケート

ご協力いただける範囲でご回答下さい。

Q1．お住まいの地区、年齢、性別を差支えない範囲でお教え下さい。
　地区（　　）
　年齢（　）歳代　性別 男・女　職業（　　）

あなたと坪井川の関係についてお聞きします。次ページの地図をご参照下さい。

Q2.日常生活でよくふれる坪井川を目にしますか？
　1．ほぼ毎日　2．週に１、２回　3．月に１、２回
　4．ほとんどない　5．全く無い

Q3.それはどこですか？次ページの地図に号○印でご記入下さい（解答例参照）。
　1．橋の上から（　　橋）　2．川沿いの道　3．自宅
　4．その他（　　）（複数回答可）

Q4.あなたの好きな（好きだった）坪井川の場所、風景を、次ページの地図に具体的に書き込んでコメントを加えてください（複数回答可）。

Q5.あなたの記憶に残る坪井川の思い出で、どのような場面が浮かびますか？
　1．川遊び　2．釣り　3．船　4．散歩　5．行事・お祭り
　6．洗い物　7．洗濯　8．その他　（複数回答可）
　具体的には（時代、場所など）

Q6．その他、坪井川に関して知っている言い伝えや興味など、自由にご記入下さい。

※ご協力ありがとうございました。

※サイエンスショップでは、地図に限するための思い出の写真を探しています。
Q5.で昔の賑わいなどから、坪井川の風景写真、写真等をお持ちですか？
　1．持っている　2．持っていて提供してもらい　3．持っていない

提供をうけ、提供していただける、またはお貸しいただける場合にご連絡を差し上げたいので、以下にお名前とご連絡先のご記入をよろしくお願い致します。
お名前（　　）ご連絡先（　　）

―アンケートの回収方法について―

本アンケートは以下の３つの方法にて回収致します。（10月17日（金）締切）

1．最寄りの店舗に設置している「アンケート回収BOX」へ投函（上記設置場所）
　設置場所：江村ユラシレンコン店　②オフィス・ルシカ　③新町民芸横丁ちか
　④熊本中央郵便局　⑤Natural and Harmonic ビュアリィ　⑥喜多屋 ロロ-ITO
　⑦川上酒店　（地域静設置予定）

2．Faxご返信　Fax番号 096-342-3507　（※またはホームページよりダウンロードして）

3．直接回収　回収お願い予定期間：10月８日（水）～17日（金）（土日祝休く）

※本アンケートは新聞・お知らせの掲示等で配布してあります。複数回収はご不便の場合はお知らせ、回収BOXまたはFaxの投函にご協力ください。

図－10　坪井川の思い出発掘アンケート

⑺　坪井川の思い出発掘アンケート

前出の図－10に示すようなアンケートを新町・古町・桜町地区に住んでいる住民の方々に配布し、坪井川にまつわる思い出や坪井川に対する思いを書き込む形で回答頂いた。アンケートの配布は10月の第２週にポストへの直接投函で行い、回収は翌第３週に直接回収や指定の回収Boxへの投函、またはFaxという形で行われた。回答率は、約6,000枚の配布に対して200枚と思わしい結果とはならなかった。これは、マンション等の直接回収が難しく、内容自体も抽象的なものだったのことなどが要因と考えられ、反省すべき点である。しかし、地域に長く住んでいる方々から多くの回答を得られたことで、特に坪井川にまつわる思い出に関しては多くの内容が得られた。

⑻　くまもと城下の町づくり連絡協議会の設立

平成20年度の大きな変化として、くまもと城下の町づくり連絡協議会（以下連絡協議会）が発足したことが挙げられる。連絡協議会は、これまで新町や古町、桜町といった地域で個々に取り組まれてきたまちづくり活動について、情報共有する場として設けられたものである。さらに、慶徳校区や春日地区といった地域も新たに加わったことで、熊本駅と中心市街地を結ぶこれらの地域がまちづくりビジョンを共有することを目標としている。**写真－12**は協議会立ち上げの際、熊本市長を囲んで円卓会議を開催した様子である。協議会のような明確な組織が出来たことで、行政との協働という面においてもより活発な活動が今後期待できる。また、現在大きな議案となっている舟運復活推進会議にも、協議会メンバーが地域の代表者という形で議論に参加している。現在は推進会議外でも行政を交えて積極的な検討が行われており、協議会が一つの組織として機能していると言える。



写真－12　連絡協議会の様子



図－11　連絡協議会用Map

今年度は①自分たちの意志で流域管理や景観形成、まちづくりに参加するコミュニティを形成すること②大学が持つ専門的知識を地域住民と共有し問題解決すること、を目的として取り組んできた。①に関しては地域が自主的に協議会を立ち上げたことで達成された。これに関しては舟運に関する議論が一つの大きなきっかけとなっており、今後坪井川がまちづくりの一つの軸として位置付けられると思われる。②に関してはまちづくりMapを作成した。これには、協議会を立ち上げた際に円卓会議の資料として学生メンバーが作成したまちづくり紹

介Map（**図－11**）も参考に、地図としてではなく城下町の魅力的な要素を紹介するものを製作する。具体的には以下の打ち合わせにおいて議論されている。

【地図作り打ち合わせ】

実施日：2009年２月23日（木）

会場：一新コミュニティセンター

参加者：西嶋、反後、村上、石田、増山、原田、馬場、志垣、村上

かたらんねやアンケートの内容を踏まえ地図を作成する。その際留意することとして以下の３つの内容があげられた。

・城下町の回遊性のビジョンが必要であるが、まだ明文化されていない。

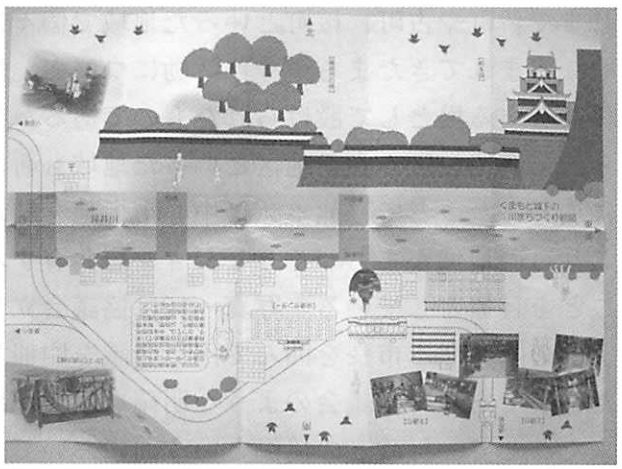
・舟運の議論が進んでいるが坪井川を軸として城下町地区を紹介しているものはない。

・地域住民やまちづくり活動をしている人たちの顔が見える地図が必要。

以上を踏まえた上で、街を歩くための地図ではなく、城下町地区の魅力的な要素を伝えるための絵図とリーフレットを作成することとなった。



写真－13　川まちづくり絵図とリーフレット



写真－14　川まちづくり絵図

⑼　第４回「大」坪井川でかたらんね

日　時：３月21日（金）

テーマ：「坪井川まちづくり勉強会－名古屋・広島とともに－」

会　場：国際交流会館

１）まちづくり勉強会参加者

前日、３月20日（木）に、熊本大学政策創造研究教育センター主催のプロジェクト報告会が開催され、その場に招聘させて頂いた以下の方々と「坪井川まちづくり勉強会」を行いました。

●名古屋の水辺から：堀川を取り巻く人々

秀島栄三さん：名古屋工業大学大学院工学研究科・准教授（人繋ぎ研究者）

丹坂和弘さん：株式会社キューブス・代表取締役（納屋橋の帝王）

甚目裕夫さん：ピアニスト・中部大学（非）講師（まちの音楽プロデューサー）

平尾高之さん：名古屋市緑政土木局道路部道路管理課・係長（あかるい市職員）

●広島の水辺から：太田川を取り巻く人々

隆杉純子さん：

市民団体「ポップラ・ペアレンツ・クラブ」・幹事世話人（水辺の名付け親）

氏原睦子さん：

NPO法人雁木組・理事長（水辺の名マネージャー）

山﨑　学さん：広島市市民局市民活動推進課・まちづくり支援担当課長（まちづくりのプラットホーム）



図ー12　第４回大かたらんね告知

２）プロジェクト報告会の振り返り

・水辺には、まちも、人も、芸術もある
・熊本はコンパクトで、歩き回り易い
・「城下町」という明解なまちの顔がある
・市民が夢を描く時代
・石橋がいい、名前もいい
・10年続けなければ意味がない
・助成金に頼らずに自分たちでできる仕組み
・とにかくやればいい、行政はついてくる

３）ディスカッション

毛利さん（新町）：

・「川」も「まち」も両方大事。熊本には大切な千年の歴史がある。
・坪井川、井芹川、ともに重要な舟運路
・川を大切にして「回遊性」を高め、熊本駅からまちへ

西嶋さん（桜町）：→ 氏原さん

・どういうきっかけで、まちと一緒にできたのか？
・熊本は比較的、大学、学生さんが積極的。広島では？

氏原さん：

・強引に、トントントンとノックから
・あまり水辺に関心のなかった場所にも行った

山崎さん：

・是非、町内会と一緒に

氏原さん：

・私たちは川の活動、まちの活動へはなかなか
・学生が入ると、すんなりまちへ、しかし、学生は卒業してしまう…
・ＮＰＯのいいところは、数年のブランクがあっても必ず戻ってこれる

池田（長崎県職員、熊大田中研ＯＢ）：

・学生は入り込んでいけるが、完全な地元ではない
・「半よそ者」が入り込んでいけるようなやり方

氏原：

・私飛び越えちゃったわよ！いつまでたっても「よそ者」→ 思いが大切

柴田（福岡大）：

・那珂川も干満差が激しい

・川を一つの「軸」として、川まちづくり

・対岸同士は、商売敵！苦労話などを聞かせて頂きたい

氏原：

・苦労だらけ、いまは、継続の時間。問題、状況はどんどん変わってくる

山崎：

・ぶつかっていくしかないのでは？一緒に仕事をしたり、例）シジミのブランド化

・まだ、まだ、解決していないことはたくさん

柴田：

・キーパーソンを発掘し、体験を共有するというとても素晴らしい事例だと思う

丹坂さん：

・川まちづくり－文明に頼らず、文化を耕すために。Cultureの反対は、Nature

・与えられた自然のなかで、心豊かに暮らす術。

・実際に、川づくりに参加する。例えば、花づくりを通して

反後さん：

・坪井川を挟んで、新町vs古町の様相。挨拶もなければ、顔も知らない

・鯉のぼりを新町－古町で。坪井川を挟んで◎4町内への取り組みに、わずか4年！

・手法はないけど、熱意！「とにかく、挨拶がしたかった！！！」

・熊本城を攻めよう！薩摩軍にも加勢してもらって！いろんな人に広がればいいな！

・ベースが一緒ということが分かって良かった

名古屋・広島から：

・名古屋も、マイタウンマイリバーの取り組み頃

・広島も、水の都構想がハード20年前、そして、ソフトへ

西嶋：

・舟運は行政からの発想ではなく、ルネッサンスの取り組みとして

田中：

・くまもと城下の町づくり連絡協議会があることがすごい！

毛利さん：

・市役所と連携して、お城と城下町で結婚式もやっています。

西嶋さん：

・新町は、かねがね「お城の正面は新町だ！」と。三丁目御門が、正式の入り口

反後さん：

・大学の関わり、感謝しています

長さん（熊本市職員）：

・私人としての発言ですが、熊本城の桜－美しいものは人を集める

・職員提案制度（福井から足羽の大桜を持ってくる、など）もある

・熊本城は、市民のセントラルパーク！

縄田くん：熊大二年生
・「もともとあったものを活かす、先に繋げる」など勉強になった
石井さん（共立出版）：
・まちづくりの熱い人たちがいっぱいいる！
・イベントをやりたい、人を集めたい
・観光客を集めるのか、坪井川周辺の人たちの楽しみとするのか、どっちかな？
・「熊本らしさ」とは？他のまちの真似事？その土地らしさ、OnlyOneは？
・熊本の交通状況なども大切な要素ではないか
・「おれんち、いいだろ！」無理矢理じゃなく、そう言えることが大切
柿本先生：
・もともと舟運は、まちづくりとは別個の話。新幹線ができて、その足を確保
大型船を、公共交通機関の代替に。10分そこそこで、駅から中心市街地へ
・あんまり手をかけずに、いまはストーリーづくり。点から線、面へ
氏原さん：
・新町vs古町の話、柴田さんの話題を聞いていて考えたこと
旦那衆の活躍、まち衆の粋。競い合うこと、動いている人が文化をつくる
反後さん：
・観光のためにやったことは一度もない、日常からの思いが大切
・自分たちのまちを良くしたい、その先に、私たちのまちへ来て頂けるのであればおもてなしたいな、いい気分になって欲しい
・人力車も、護岸も歩きにくい（自動車、舗装）
西嶋：
・観光はついてくるもの
・「数だけ増えて、私たち幸せになってるの？」、示し易い「数」から「質」へ
平尾さん：
・いろんな仕掛けをつくっている
・市民、行政、大学の役割＝できないことをカバーできる関係づくり
・下から上がってきた気運を、地に足をつけたいプロジェクトがある
・行政は失敗を恐れるが、失敗しても修正すればいい、連携のなかに何かが見える
甚目さん：
・広島と熊本、そして名古屋、お城繋がりで
・気候、環境、そして時間、こうして続いていけば、壁が壊れて、つながっていく
丹坂さん：
・水辺でデートして欲しい！雰囲気よくしたいなぁ、こうしたら楽しいなぁ
・境がある話が多いなか、学生が突破口になるのでは？きっかけが大切。
柴田さん：
・ピンチをチャンスに、競い合うことも大切
・防災、防犯に関することせっかくの顔を隠してしまう、サングラス的にハードではなく、人のネットワークで対応する、という方法もある！
防災をきっかけに、他の平時のつながりにも

氏原さん：

・学生に研究は求めていない。存在そのものに期待している。

岩田：

・「文化を耕す」っていい言葉だなぁ

・「学生がどうしてまちづくりに関わるのか？」一人悩んでいたけど…

・悪い言い方をすれば、雑用にかり出されている？
それも、文化を耕している行為。実は大人も、本業と関係ないことをしている

・僕たち、地域風土計画研究室は、そういう本質を知らないと、デザインもできない

・学生は出入りしていくが、いい学生が来てくれることが伝統になるといい

・来年、サイエンスショップ誰か一緒にやらない？

・僕は遠距離恋愛中。うまくいっているのは、まちのことを自慢できるから。みなさんに感謝。

山崎さん：

・熊本の人たちの話を聞きたかった

・正面突破、真摯な態度で、まちづくりに臨むことが大切

・まちづくりは、自分のためにやっている

・学生さんとの関わりに関して、一つは、学生のフィールドになり得る自分の住んでいるまちを知ること、愛すること。好きになってもらいたい

4．地域社会の協働に関する分析

本章では研究のまとめとして、坪井川サイエンスショップにおける地域社会の協働過程を分析する。ここでは、地域社会のステークホルダーとして、地域住民、行政、大学（第三局あるいはアソシエーション的立場として）の3主体を設定する。

平成21年度も坪井川サイエンスショップは事業としては継続したが、筆者が一年間研修のため熊本を離れ、地域住民も連絡協議会の運営が忙しく、様々な主体のＳＳへの関わり方が変化したので、第Ⅱ期とは区別し第Ⅲ期とした。筆者が帰国後の平成22年度も、主に岩田が関与してきた地域住民たちとの連携は続き、平成21年度との連続性が認められたので、平成21・22年度をもって坪井川ＳＳの第Ⅲ期とした。

(1) 各時期の特徴の整理

1）第Ⅰ期

坪井川ＳＳの第Ⅰ期は、熊本大学政策創造研究教育センターのコーディネーターであった畑中寛氏が牽引し、平成17・18年の2ヶ年で、20回の研究会と二度のプロジェクト報告会、そして平成19年3月には第Ⅰ期の締めくくりとして熊本市内のピーエスオランジュリにて「坪井川流域ミーティング」が開かれた。

第Ⅰ期から市民メンバーとして、ＳＳと深く関係してこられた西嶋公一氏（オフィス・ムジカ代表）は第Ⅰ期ＳＳを振り返って、以下のように語っておられる。

・当初、大学から呼びかけられたサイエンスショップであったが、坪井川に関する様々な感心を大学の先生たちと共有できたのは、興味深い取り組みだった。防災、水質、景観、土木遺産など、時には大学の教員だけでなく、熊本市や国土交通省の行政マンたちも専

門家としてＳＳで話して下さったことが印象的であった。
・地域住民と大学の協働は「多様」だと実感した二年間であった。

2）第Ⅱ期

第２章、第３章で示した第Ⅱ期のＳＳの特徴を要約すると、以下のような分析結果が得られた。

・平成19年度は、専門家として地域マネジメントに関わる大学の資質として、①学生供給による地域活性、②業務以前の業務が可能、③多様な情報発信、の３要素が抽出された。
・平成20年度は、ＳＳとしての大学と地域との連携に悩んだ時期もあったが、地域マネジメントにとって地域住民の多様かつ日常的な生活環境に対する改善意欲がその推進起点となることが認識された。

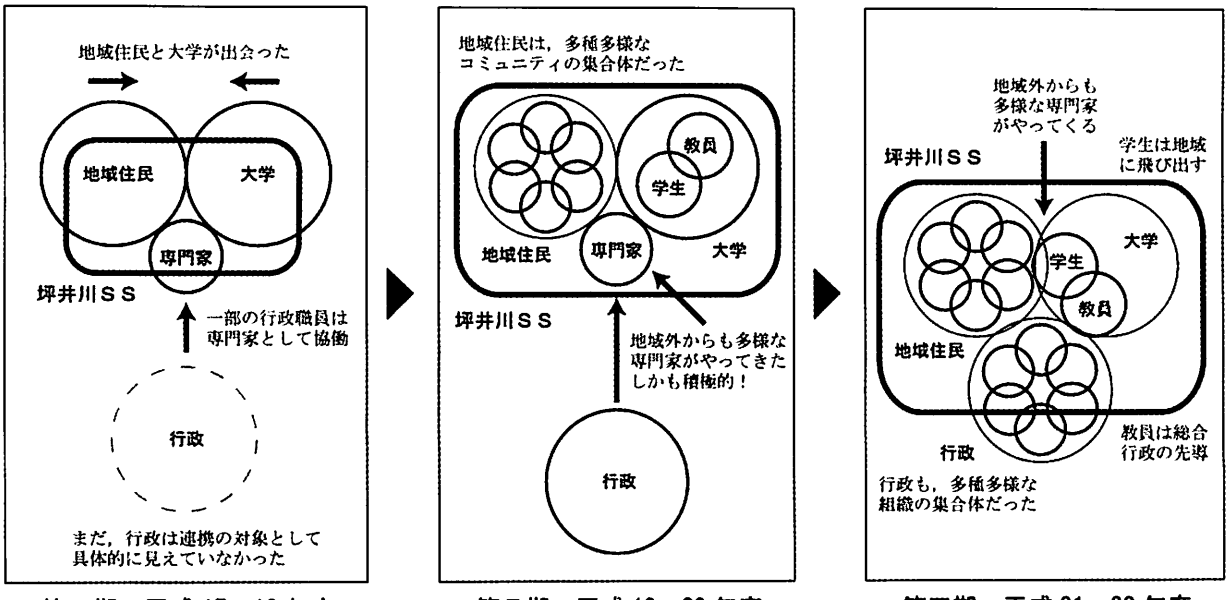
3）第Ⅲ期

地域住民の方々がくまもと城下の町づくり連絡協議会の運営に取り組み、大学では博士後期課程の岩田が学生主体のメンバーで地域に最も近い存在としえる町内会と連携し、洗馬橋橋詰めの階段を整備するＷＳなどを実践した。

いずれの活動も、これまでの坪井川ＳＳでは実際に協働の主体となりにくかった行政、具体的には熊本県や熊本市の様々な部署との連携のきっかけが生まれた。

⑵　協働過程の分析

坪井川ＳＳの第Ⅰ期～第Ⅲ期の各主体、地域住民、大学、行政の協働過程を分析した結果を図ー13に示した。



第Ⅰ期：平成17・18年度　　第Ⅱ期：平成19・20年度　　第Ⅲ期：平成21・22年度

図ー13　坪井川の川まちづくりにおける協働の分析

第Ⅰ期、大学の呼びかけに応じて地域住民の有志がＳＳのメンバーとなり、坪井川ＳＳの枠組みが確立された。しかし、行政はまだ連携の対象として具体的に意識はされていなかった。ただ、行政の中かでも専門家としてＳＳに関わる人々はいた。

第Ⅱ期の当初、地域住民と大学の連携のかたちを模索していく中で、地域住民とは一つの枠組みでくくられるものではなく、多種多様なコミュニティの複合体であり、同一人物がいくつものコミュニティに属することもあることが理解できた。一方、大学では学生が担うＳＳや地域づくりにおける役割が強く意識され、学生たちが積極的に地域住民と連携を図ることでＳＳも活性化し、大学のＳＳ、地域マネジメントにおいて果たす役割が見直された。また、地域外から積極的にＳＳに関わる専門家、場合によっては地域住民、行政マンも現れた。

第Ⅲ期、まだまだ模索の状況ではあるが、行政がＳＳの協働の主体としてみえてきた観がある。一口に行政といっても、国、県、市といった地域との距離も異なり、土木、建築、都市計画、福祉、文化財など様々な分野が地域と関係しており、地域住民と同様多種多様な協働のかたちがありえる。しかし、地域住民、行政、大学のどの主体が欠けても、地域マネジメントの持続可能な進展が難しくなることが確信できた。

謝辞：熊本大学政策創造研究教育センタープロジェクト「坪井川を活かした川まちづくり」に関係して頂いた、数多くの皆様に感謝の意を表します。

【参考文献】

1）杉万俊夫編著、コミュニティのグループ・ダイナミックス、学術選書005、京都大学学術出版会、2006．1．

2）柿本竜治編、坪井川とともにくらす、熊本大学政創研叢書2、成文堂、2007．3．

（2011. 1. 17 受付）

BASIC ANALYSIS ABOUT CORRABOLATION PROCESS IN COMMUNITY DEVELOPMENT
－CASE STUDY ON THE SCIENCE-SHOP WORKSHOP－

Naoto TANAKA and Keisuke IWATA

In resent years, on the regional management and public policy design the participation of inhabitants and the collaboration with local communites become very important. The aim of this study is basic analysis about corrabolation process, using the record of activities of science-shop workshop which our laboratory join 2007.4-2010.3. As a result, the advantage of university as an expert of local management are below; 1) Local activation by the student supply, 2) The project before the business is possible and 3) Various information dispatch. And, improvement of regional environment by inhabitants based various daily life is necessary for the local management.